

# 「フードシステム」を扱った食教育の可能性

杉山 真由\*

## 1. 問題の所在と目的

2005年に食育基本法が成立し、第2次食育推進基本計画では、達成目標を掲げているが、それはあたかも食のあり方が一つしかなく、そのあり方であれば食の問題は解決されると捉えられてしまう。よって、常に現実にある食の問題を捉え直し、食のあり方を検討していく必要がある。

筆者は、現実の食の根本的な問題として、「フードシステム」における支配関係の問題に着目した。「フードシステム」は、高橋正郎によると、生産から消費までの「食料・食品のトータルな流れ」とされている。その流れの中で、一部の主体である行政や企業がこのシステムの枠組みを決めてしまい、それによって生産者や消費者が不利益を被り、環境にも影響を及ぼすという問題が起きている。この問題を、本研究では、「システム化」による支配関係と呼ぶこととした。ここで、「システム」を特に支配している一部の主体が行政や企業であるという捉えは、ユルゲン・ハーバーマスの行政システムと経済システムの「生活世界の植民地化」理論より援用した。

よって、筆者は「フードシステム」における支配関係を捉える食教育が必要だと考える。しかし、それは事実を知るだけでなく、どのように捉えさせるかが重要である。よって、捉えさせる方法を考える際に、パウロ・フレイレの「意識化」理論から視座が得られると考えた。「意識化」とは、対話を通して、常に現実にいる自分とその周りの世界を意識し、現実を理解しようとする知的努力と現実への批判的介入を行い、世界との関係性を変革することであると捉えた。

以上より、本研究では、「大豆」に着目し、雑誌や文献に掲載されている、過去に行われてきた大豆を扱った実践の傾向と課題を明らかにすることを目的とした。その際、「フードシステム」における「システム化」による支配関係の視点と、フレイレの「意識化」の視点から食教育のあり方を検討し、そこから得られた観点によって分析した。

## 2. 研究方法

本研究の方法は、文献研究と雑誌や雑誌以外の文献による実践分析の2点である。

文献研究では、食教育、フードシステム、学習論の文献によって、「フードシステム」を扱った食教育のあり方を検討した。実践分析では、「大豆」を扱った実践を、家庭科、総合的な学習の時間、社会科の実践を中心に扱った雑誌や雑誌以外の文献より分析した。分析では、まず、大豆を扱った実践107件の基本的特徴を分析し、次に、「システム化」に分析の重点を置くため、対象を大豆の「フードシステム」上の問題を扱った実践20件に絞り、「システム化」と「意識化」の視点より分析した。また、時期を1974~1994年の「前グローバル化期」、1995~2004年の「グロ

---

\*愛知教育大学大学院家政教育専攻

ーバル化・自己責任期」、2005～2013年の「食育重視期」の3つに区分し、分析を行った。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 大豆の「フードシステム」における支配関係の実態と「意識化」の必要性

本研究では、辻村英之の捉えに依拠し、「大豆」という1つの食品の「フードシステム」における支配関係を具体的にみていくことで、その支配関係を捉えることとした。その結果、大豆には、多くの問題が隠され、「システム化」による支配関係があることが明らかとなった。問題として、生産者では、大豆種子の毎年の購入、特許使用料の支払い、損害賠償、消費者では、ポストハーベスト農薬の残留、遺伝子組み換え表示制度や安全審査システムの欠陥、環境では、遺伝子組み換え品種栽培による生態系への影響、大豆畑開拓のためのアマゾン伐採、除草剤による土壌汚染や健康被害などがあった。よって、子どもたちが「システム化」による支配関係を捉える意義は、支配関係が身近な「食」にあることに気付く点、自分も関わる問題として考えていくことが支配関係を持続可能なしくみに転換することにつながる点の2点において、意義があると考えられた。

また、このような支配関係を捉える方法として、フレイレの「意識化」が必要だと考える。その必要性として、生産者や消費者として支配関係に組み込まれていることを自覚する点、伝達されがちな食教育に対抗した、「対話」や「現実への批判的介入」といった教育方法を行う点がある。

#### 3.2 「大豆」を扱った実践分析

まず、「大豆」を扱った実践は、107件であり、全体数で考えると非常に少なく、内容としては、大豆の加工のみや加工と栽培が多かった。しかし、内容別に「フードシステム」上の問題を扱っている実践数をみると、大豆の加工のみや加工と栽培の実践では、問題を扱っているものが、合わせて61件中2件と非常に少なく、「フードシステム」の構造を捉えやすい内容の実践において、ほとんど問題が扱われていないことが明らかとなった。

また、「システム化」と「意識化」の視点より、「フードシステム」上の問題を扱う実践に絞って分析した結果、次の3点の傾向がみられた。1点目に、「システム化」を扱っている実践数は少なく、さらに支配関係を捉えられる実践は全くなかった。2点目に、「システム化」について扱っていても、扱われる問題は、時代や現状に対応していなかった。3点目に、「システム化」の問題を扱っていても、具体的に実践方法として考えた「意識化」の視点でみると、「考える機会があり、自分と結び付けられる」段階でとどまっているものが多く、「問題を発信したり、解決策に取り組んだりする」段階まで行っている実践は少なかった。

### 4. 終章

以上より、実践では、「フードシステム」上の問題や「システム化」を扱っておらず、「意識化」の視点もあまりないことが明らかとなった。「システム化」による支配関係は、捉えるべき重要な問題だと考える。特に小学校や中学校の段階では内容として難しくても、最初は「フードシステム」上の問題を知ることから始め、例えば、開発教育の参加型学習を導入とするなど工夫して、支配関係まで捉えられる食教育を行っていくべきだと考える。 (指導教員 山田綾)